



たから 財やちよ

八千代市文化財
No. 7
2022. 11. 7
(令和4年)

特集 村上正覚院の文化財

村上にある正覚院（八千代市村上 1530-1）は真言宗豊山派の古刹で、本尊は大日如来です。正覚院には次のような不思議な伝説が残っています。保元年間（1156年～1159年）に、日ごろから殺生することを好き好んでいた平真円という人がいて、近くの阿蘇沼で鴛（おしどり）の雄を射殺しました。その夜に鴛の妻が人間に姿を変えて真円の前に現れ、「日くるれば 誘ひしものを 阿蘇沼の まこもかくれの 一人寝ぞうき」という歌を残して帰っていきました。これを哀れに思った真円は、それ以降悔い改め、出家をし、この寺を建てたというものです。このような伝承から正覚院は鴨鴛寺とも呼ばれ、おしどり伝説の寺としても知られています。

正覚院には貴重な文化財が数多く存在しますが、今回は県指定文化財の木造釈迦如来立像、市指定文化財の正覚院釈迦堂、宝篋印塔についてご紹介します。

○木造釈迦如来立像（県指定文化財）

「木造釈迦如来立像」は京都嵯峨にある清凉寺にあるものをモデルにして作られたもので「清凉寺式」と呼ばれ、昭和35年に千葉県の指定文化財に指定されました。

清凉寺式の釈迦如来像は平安時代末期から鎌倉時代に流行したもので全国に100体余りあり、県内には他に茂原市の永興寺にしかありません。

清凉寺式の釈迦如来像は、渦をまく縄状の頭髮、首元まで覆っている衣に刻まれたひだが胸から下へ波のように左右対称に美しく弧を描いている等の特徴が挙げられ、お釈迦様が生きていた際の姿を写した像とされています。清凉寺式釈迦如来像は仏像の中に納入品をもつことも共通した特徴で、正覚院の木造釈迦如来立像の中にも天文15年（1546年）、延宝2年（1674年）に修理した際の木の札が残っていました。



作られた年代は約700年程前の鎌倉時代後期と考えられています。現在は秘仏として普段は見ることはできませんが、年に一度4月の「花まつり」の日にその姿を見ることができます。

○正覚院釈迦堂（市指定文化財）

正覚院釈迦堂は木造釈迦如来立像が安置されているお堂で、昭和52年に市の指定文化財に指定されました。

建築された年代は、厨子(仏像が納められている仏具)に延宝2年(1674年)の記載があることから、同じ頃と考えられています。

屋根や軒回りは改修が加えられ、当時のものではありませんが、お堂の円柱の柱は当時のまま残されています。建物の幅は正面3間、側面3間の大きさがあるので三間堂と呼ばれています。1間は長さの単位ではなく、柱と柱の間隔を間と呼び、長さは長短いろいろあって一定の距離とは限りません。

正覚院釈迦堂は千葉県下には比較的少ない和様建築(日本に古くからある寺院の建築様式)のお堂で、地方的なくずれもあまり見られないため、市内でも貴重な建造物とされています。



○宝篋印塔（市指定文化財）

宝篋印塔とは、「宝篋印陀羅尼経」というお経を納めたお墓や供養塔等に用いられる仏塔で、鎌倉時代中期以降に造立され全国に広まりました。

正覚院釈迦堂の裏山の墓地にある宝篋印塔は妙吽という女性の供養のために応永18年(1411年)に建立されたものです。

市内で確認されているものの中では最古のもので、室町時代の代表的な信仰遺産であり、昭和53年に市指定文化財に指定されました。

指定された当時は、一番上の細長い「相輪」の部分と真中の四角い「塔身」の部分が欠損していましたが、現在欠損していた部分は復元されています。

